



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5

始



特257  
689

### 序

昨年來、日本放送協會から新作能の依頼を受けて居た。ところが又、本年十一月十三日に芭蕉二百五十年忌を修するため芭蕉の能を新作せよとの依頼を日本文學報國會から受けた。そこで此の一篇を作つて兩者に對する責を塞ぐことにした。節附は櫻間金太郎、脇寶生新、笛一増瑛二、小鼓北村一郎、大鼓安福春雄、間狂言野村萬藏、三宅藤九郎。放送は前記の役者にて十月十日。演能は矢張り前記の役者にて寶生舞臺十一月十三日の筈。

昭和十八年八月二十四日

ホトトギス發行所にて

高濱虚予

奥の細道  
ワキ  
 是六都中、市旅の宿内。旅籠屋の  
 主として。ゆき御坂新門の遊女とやう  
 ん。最寄り宿のすててひとへ。なほ旅人  
 を待つもやとあひ。ひ。和上  
柏葉合奥の細道  
 尋ね来て。尚行く事ぞ。當げき。

## 奥の細道

役割	装束		附
	シテ	芭蕉	
直面又ハ芭蕉面、唐帽子、襟浅黄、着附厚板、茶水衣、腰带、墨繪扇、笠、杖	芭蕉		
面小面、襟赤、鬘、鬘带、着附箔、唐織	遊女		
黒骨扇子	ツレ		
賢斗目、素袍上下、小刀、扇子	ワキ		
着附縫箔、襟紅、女帯、ヒナシ、扇	遊女	旅籠屋	
二ノモ・アト同裝	ノ主人	ノ主人	
總体二重クレス様、サラリメニ大切ニ謡フベシ	間狂言	二人	
目番四 (物在現)		曲柄	月九
級三	誓古順	宿振市國中越	季所

それ月日へ百代の過客すにて。行き  
ゆく年も旅人あり。また舟の上り下  
生涯をほゞ。馬の口取つて先をほゞ  
よむれ。且と旅みて又極なり。我も  
しづれの年より。行雲の風ミロコト。傍られ  
て。傍らの思ひ止カハさむを過ぎ

す。春の頃。林と雪とをあざわら。  
長途乃旅す。かでちぢてかじて松鳴の月。  
象泻アシナカ。雨は明け暮れ霧モヤ。  
柳タケ酒田サケダ。やううり日がまな遙アツみ。  
墨クマひ拘クニヒる抱き。龜カメが窓カウをも。哉え未タガてぞ。

みづへゆる。まことに報せの。市振とく  
よ氣きかぬなり。急いで。おまえ  
は早。此國の。宿泊なる。親父が  
おもむく。市振の。宿泊。あたへ  
る。お宿と。ばよと思ひ。如何よ  
の内。裏内や。他。誰もて渡り。ふ。

景。旅の。若く。一宿の。宿泊。す。  
やすか。國の。宿。ほろ。年。かく。がく。れ  
い。かく。ばく。林と。山。山野。け。す。  
旅ぐ。林と。山。山野。かく。かく。す。  
ぐ。行。と。今。かく。へ。ゆ。せ。かく。す。た  
る。旅と。山。山野。お等。が。命。かく。す。

海カトもまだうち行植ゆる日エに暮ハと終ス。今アキ  
なり僅シテの笠ハタケ内ナカニ下シ涼ラク。或ハ先シ節セイと笠ハタケ  
の間シテの今日ヒマツルの月ムツあがムツ御ミたりト和ハ徒カ  
歩ハシぬれば林実リノミツ吹ハラハラ落馬ハシケルとハ。季ハの無ナシ  
きハシメくとハてハわカきハシメ上アゲルそれ百嚴ハジカツ九巖クモリ  
のけハシメよ物モノ有リ。かハシメよもハシメうハシメて風羅ハラハラ

坊ハタケといふ。深ハシメる羅ハラハラの内ナカニは破ハラハラれやすハシメん  
とハシメとハシメ。いふやあハシメんハシメ。是ハシメ芭蕉ハラハラ  
といふのなハシメ。傍ハシメは傍ハシメは傍ハシメ。是ハシメ芭蕉ハラハラ  
又ハシメは傍ハシメて傍ハシメは傍ハシメ。唯ハシメ病ハシメある人ハシメは倦ハシメ  
みて。世ハシメをいふひる人ハシメも似ハシメたり。つづく  
つる年ハシメ月ハシメの移ハシメり本ハシメ。やさしくの辭ハシメ

と思ふ。仕官無事の地を羨む。佛  
薩迦家が入るとぞも。飛鳥の精霊  
を帝して。皆く生涯の。薄々なすカタト  
あるてもあつ時ハタチ。併んで放擲せらる  
を思ひある時ハタチ。遂ハタシて人ヒトよ。勝ハサクこ  
とをわたり。是れ猶やハタシり。且ハタシが

爲ハタシが身ハタシからず。づひよと無能ハタシを羨ハタシす  
てこの一筋ハタシよつたがる。あり和歌ハタシは無事  
。宗祇連歌ハタシを輝く。雪舟の  
画ハタシ於ける。和体ハタシの。筆ハタシふ於ける。貴く  
ものへうか。和歌ハタシも萬葉の昔ハタシより。歌  
の流ハタシりあり。唐ハタシかへるなり。人ヒト

廢へ情を歎ぐ。あは景と翁が心と  
推くもつなり。まかしの流をさむこ  
とは能詠起竹。秋が口ばかの美。  
き山もく海深く。四時の変化す  
て。天地自をとある。花鳥風  
月を詠歌。神納り氣騒りて。言

葉化候す。風懷する世を度て。  
こひ道をも盛くな。後の世までも  
盡す。しづか芭蕉の翁す。い  
水宿る新鷗のめどと。三人の遊女  
泊。使ひ戻れる老ひ。ひどくぬれと  
て。老けりと情。此も芭の浦。

れ聞えど。心もて思ひまく、思ひ出され  
らん。おはなむの、あひだせど。それもも  
とより旅の身じゆゆの諸國とわざりま  
で。  
千里は旅がうる。旅情を包  
まず。人の情ふさうす。彼の将軍と  
異からず。寧の匂ひ俳諧の。大作。

かう。此にあや。御心鳥かれり  
と言ひ捨てこそ。固い。みづれ。  
ある。さう。さうありあすか。何事でござる  
ちと相送もあゆがござる。先づゆれせられ。別  
あた。さて御相送と。何事でござる。別の事  
でもござる。それ迄連れて、あつた年寄りの下へ。  
いよ。さう限り彰四へ帰らねばなりませぬ。され  
うちハ妻達女三人ゐる事でござる。あんと心細い  
佛の事でハ寺へゆき、させらる通り。それ  
からハ女たちの旅立つります。お伊勢様は。

今迄未だ道よりハ進ひよ遠いと申す。思ひぞ心  
許あじ事でござる。<sup>ニス</sup>「泣」<sup>ヲモテ</sup>明燈のタ顔敵ハ  
今長いく丈をありてござつた。大市そん丈をかう  
人下おへせて、國元へ廻けらるゝものでござらう  
アドガテハタ顔敵ハ久を書いてか奉りあつた。アドガム  
タ顔敵ハ又書き事ハ得ぬ。や。妻達が並ぶのみ  
うた様が又字なりともあつて、使いと残さう  
でござるもいかアドされぬよ。所が氣が附かゞやれ  
た。妻も針のわざのやうあ宿でも一筆餘りて見  
ませう。アドガムぞ書きあをう。アドガム  
アドガム矢立と取上げて。たゞく志く事ハ撃  
あるハ心細い。新婚あつた。うまい毎飯食いたい。

三里の外へ高らかにアド「わが身がと取  
上げて。お出でくよ高く車へ。旅はあらへんゆく  
は。新婚宿へくよ。からい鳩鳥賊食はだい。三里の  
外へ轡くづく。アモアして妻達の又がたつと出  
ああした。タ顔敵ハおどりま終へたれども見え  
はある。どの向かんぞ一筋回つて、拂ふと拂ら  
たゞてくづく。アド「これハ一殿とよアシカク  
モ「妻がまづ吸ひすがう。どのの世間はなまく舞を  
まきアド「心もあ」た  
アド「心もあ」。ほのまと踏むたりやたうの  
アド「ごの壠」アモ「おの壠は附かれてゐる。アド「君を  
アモ「おれとアドガムとアモ「また。また」とかよがり

かくわく

アト今度は毒が足りませぬかとせん

ました

アトシテおれへ。旅へ出る。夢へあがねた  
シテいた宿のアドの宿。軒並木。月とアゲハ  
モモイロとアカヒキと。あとゆうてやがりのまつり  
スリ泣きじかなる。から泣いてゐてもいやう事  
がない。最初の家のままで。相窓。ゆかふ  
うあるとのお事。や。や。伊勢の方。りかへ  
らば。伴で持たう。ひよのあひ。アーベルト。あの  
かうでござる。ヤセタ類似のあそびにててアドま  
せす。かくわく

マ  
ぬりづりあつた。芭蕉の音を泊  
まし。遊戯もどよ。家に。や  
りあひ。夜をぬけて。かくわくの声な元  
あ鳴る。さうなあれ。深き秋の。寝ぐ  
月を待つよ。ミソノ。詫上ナシ。ひの。  
まくまくも。よ。ちかくあつた。

旅衣。かさねておむくもあく。いよいよ  
して、明け暮れ。どうぞ諸君歸く  
キ鳥。此を思ひとめずませ。いま  
す。何事までござ。御傍よき食  
されて、賜り。曉も遙かです。され  
ば、待ち。さて月影よ、待ちます。

心あきが節ふ。我は遙らんとへ何  
事ぞ。和歌等ハ賤キ才女なるが。女許  
りのやうかあく。これより伊勢ハ都  
み。御傍の伴ひたまゝ。ひゞみ初ハ  
申なり。かねがこそ正氣を後アシ。おち泣  
き寝アシ。あれければ。今又みゆ。伊勢

まだ伴ひあれどいよ。わが道程をわざ  
すの。遇の願ひ假れども。まことに行  
の、流と人情ようがひ。一つ家よ遊が  
ゆも在り萩と月。されど今宵の風  
雅あつ新くて我ひ。しかもつかて面  
白や今ほとて痛の。軒端の月を筆

とも見え乱れぬ。たる萩もと。即床  
と思ひ廻ねる。こよ又危痕の。寧  
ちう病は誰か舟。海さう云て世を累  
めぬ身とたゞか。定めあき  
勢り。日の葉因深き。伊勢また  
て秋の伴りと。國もあらへあら

あれ。昔西川へ入る。にはて天明かりの宿。今のはまくも同宿。其が一夜と泊すとも。遊ゆり庵より萩と月。情の陽でもあるきのと。そのととぞりを。墨色を。墨色までやうやうありふ。一後の宿をかり枕を残りぞ更ふ情ま

さりとて花菖蒲の露のやうに  
ひたむかふ。あくわからぬと餘ふりや。不  
便の人の顔をみし。見捨てて城へ行く。  
雲のどうするとう多きがぞ。体勢の  
津山持すんと。道りへんへ絶えざるよ。其のあとで徒ひて。行うぞ其便りがち。

神明の加護あるサヘビ。悪な  
れと祈り。心の病からぬかづ。  
あらわさある些。と袖を  
引かれて。別れの意をあらわす。一つ  
家よ。中井。一つあす。道女が廻り。萩  
と月。合掌。母女の浦たり。廿三日。一  
月。母女の浦たり。廿三日。

彼と戦。もとで。めし路の秋の風。  
あたして。北國日和定  
めぐく。折。晴雨丸を笠と取り。一  
葉と扇。枝とつる。あはせ。風。林。  
あらわす。うち。めぐる。あとを見送  
りて。また。さげて。ひかえ

け元一  
さきうわ  
のじ  
三三三

(出版會承認)  
260746號

有所權作著



昭和十八年十一月五日 印刷  
昭和十八年十一月十日 發行

二〇〇部

鷲著者宗家

定價

金六

拾

錢

特別行爲稅相當額

金六

拾

錢

費價  
金六拾二  
錢

作曲

高 濱 金 太 虚

東京都京橋區銀座西六丁目三番地

櫻間金太

東京都四谷區四谷二丁目十三番地

吉 衛 郎 予 郎

株式會社江川堂代表者

大澤音

東京都京橋區銀座西六丁目三番地

わんや書店代表者

江島伊兵衛

東京都四谷區四谷二丁目三番地

大澤音

東京都新宿區前二章裏通

支店 東京都神田區淡路町二丁目九番地

配給元

日本出版配給株式會社

新作謡曲

高濱虚子作  
金春宗家閲

櫻間金太郎曲

## 時宗

定價六十銭  
(荷造送料六銭)

蒙古來襲を儀として退けた時宗の雄志を謡ふ。

## 青丹吉

定價五十銭  
(荷造送料六銭)

奈良朝文化の極盛時を憶ひ「青丹吉」奈良の都を謡ふ。

東京 わんや書店發行



終